

2023年12月3日 主日礼拝 待降節 第1主日 アドベント・聖餐礼拝

説教題：「主があなたと共におられる」聖書箇所：ルカ福音書1章26-38節（p.100）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌93-1-11 交読詩編：第61編1-9節（p.65）

讃美歌：83（聖なるかな）／234（ヨルダンの岸で）242（主を待ち望むアドヴェント）／81（主の食卓を囲み）／
27

「今週の聖句」〔マリアは言った。「わたしは主のはしめです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。〕（ルカ伝1：38）

「牧師室の窓」「北国に雪降りマーク付き初め待降節の時近づきぬ」

「アドベント迎えて心温まる主の降誕に思いを馳せて」

(1)皆様おはようございます。今年の長かった夏、短かった秋が終わり、12月になりました。本日は待降節・アドベントの第1主日礼拝を迎えることになりました。私たちの日常の暦・カレンダーは1月から始まりますが、教会の暦・カレンダーでは1年は待降節・アドベントから始まります。

何故でしょうか。それは神がなさる偉大な出来事には大切な準備期間があるからです。旧約聖書の創世記に記されている天地創造の物語にはそのことが記されています。〔(創世記1:1)初めに、神は天地を創造された。(1:2)地は混沌であって、闇が深淵の面(トヘ)にあり、神の霊が水の面(トヘ)を動いていた。(1:3)神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。〕混沌にして闇の状態から光ある大地の世界が創造されてゆきます。そこには「神の霊」が働いていたことが記されています。

なんだ馬鹿々々しいと思えばそれで終わりです。そのことに何かがあると探求心を、アンテナを動かせば何かが見えてくるのです。私たちの不確実な人生を生き抜こうとする確信が与えられるのです。また、イザヤ書はイザヤが見た幻の状況から始まります。エレミヤ書は母親の胎内にいたエレミヤに主の言葉が語り掛けられて始まります。サムエル記もサムエルの母親についての記述から始まります。

そして、重要なことは、物事の準備の期間とは「祈りの期間」であることが浮かび上がって来ます。旧約聖書に書かれている「祈り」とは、(何々を)して欲しいとの願望を、望みを訴えることではありません。大切なことは神の声に耳を傾けること、そして、悔い改めることにあります。どこの祈禱会でも、祈禱会では、神に対して、何々をして欲しいとの願い事を並べる祈りになってしまいがちです。そのようにしていると祈りとは聞き入れられることの無い、実現することの無い願望を言葉にすることになってしまいます。聖書の言っている祈りとはそうではありません。

聖書の言っている祈りとは、希望が生まれてくる望みであります。

…新約聖書のローマの信徒への手紙12章11節12節ではパウロは次の様に言っています。〔(ロマ書12:11)怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。(12:12)希望をもって喜び、苦難に耐え、たゆまず祈り、〕と書かれています。

ここまで申し上げますと、アドベントはキリストの降誕という過去の出来事を記念するだけではなく、希望を持って神の国が実現することを確信するために祈る期間であると言うことが出来ます。待降節は主の降誕を迎える、準備をする期間です。御子の降誕・クリスマスと言う希望に向かって、自分自身の内面と対話する良い機会であります。僅か3週間と数日の期間を大切にしましょう。丁度、年末の慌ただしい期間とも重なりますが、慌ただしさの中にこそ、物事の重要性を判別する良い機会であります。

(2)今日の聖書箇所はルカによる福音書1章26節から始まります。所謂「受胎告知」と言われている場面です。西洋の絵画では数多く書かれています。レオナルド・ダビンチやボッティチェリの絵がよく知られています。岡山県の倉敷にある大原美術館に保管されているエル・グレコの絵は躍動的であり、漫画・アニメのように描かれており見ていて楽しくなるようです。私は岡山市内に住んでおりましたので、大原美術館にはしばしば行きました。東京では、ある期間を共に働いていた友人たちとは美術館巡りをする同好会があり、外国を含めた美術品の感想を意見交換しています。この友人たちは外国語が得意であり、年齢にも拘わらず、意見交換や議論は活発です。

エル・グレコは徳川家康とほぼ同時代に生きたギリシャ人です。エル・グレコの「受胎告知」が何故、日本に、倉敷に所蔵されているのかは、日本とヨーロッパの近代史を学ぶ上での良き学習材

料になります。聖書の一場面が絵画となり、その絵画が人間の歴史の中で果たしてきた役割を尋ねることは、聖書の学びを深めることにもなります。

(3)今日の聖書箇所が登場人物は天使ガブリエルとガリラヤのナザレに住んでいるマリアの二人だけです。そして観客はこの場面を見ている皆様お一人おひとりのみです。26節27節を見てみましょう。〔(ルカ伝1:26)六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。/(1:27)ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。〕初めに書かれている「六か月目に」と言うのは、今日の聖書箇所のすぐ前に洗礼者ヨハネの誕生が天使ガブリエルによって祭司ザカリアに告げられ、妻であるエリサベトが確実に妊娠していたことからの6か月目と言う意味です。後に洗礼者ヨハネとイエス様との関係がルカ伝福音書では最初に記されているのです。組み込まれていると言った方がよいでしょう。

天使ガブリエルの役目は重要です。余談ですが、聖書に出てくる天使は夫々に役目があり、階級が区分されているようです。私と神学校の同期で卒業した人が卒業論文で「天使について」を書きました。神学校を卒業して北国地方の教会に行き、現在は中国地方の教会で牧師をしています。神学校の4年次にフィリピンのネグロス島（観光名所のセブ島の隣の島）にあるシリマン大学大学院神学校に短期留学を数人で行きました時の友人です。頑張り屋で気さくな人であり、機会があれば講壇交換によりここでお話をさせていただければと思っています。

(4)話を聖書箇所に戻しまして、マリアの「いいなずけ」（婚約者）であるヨセフはアブラハムの、（そして、ダビデの）子孫と書かれています。マタイによる福音書の第1章にはイエス・キリストの系図が書かれています。その系図の中に4人の女性が妻の立場として名前が記されています。イエス様はアブラハムやダビデの子孫として記録されていますが、今日の聖書箇所を読めば、実はそうではないことを証明しているのです。ここにはそうであるように見せて実はそうではないことを証明しているのです。聖書にはその逆のことも書かれています。そうではないように見せて実はそうであることを証明している。この様なことは私たちの生活でも、或いは人生の中でも表れてきます。そのような時には、どの様な時にでも、主の御心は何であるのかをよくよく十分に考えることが大切です。つまり、普段から、主への祈りを、主との対話を行なっていれば不安の状態から離れることが出来るのです。

(5)不安と言えば、28節29節にマリアの心の不安が記されています。〔(1:28)天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」/(1:29)マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。〕この時のマリアの年齢は14歳前後と推測されています。天使ガブリエルからの思いもよらない言葉にマリアは困惑したのです。と言うことは、マリアと言う人は、物事をしっかりと理解し判断する力があることを示しています。それは、1つには働くこと・労働していることによって培われた現状把握能力・処理運用能力が身に付いていたと言えましょう。2つ目には、マリアは当時の教育、即ち、ユダヤ教の教育を村にある会堂で受けてきたと考えられます。

旧約聖書の申命記6章に「聞け、イスラエル」「子供たちに繰り返し教えなさい」と書かれています。29節に「考え込んだ」と書かれています。天使ガブリエルが突然に表れたことに対して、マリアが驚いたことは書かれてはいません。マリアが「考え込んだ」のはガブリエルの出現ではなく「言葉に戸惑」ったのです。このことからマリアは現象面で振り動かされる人ではなく、相手の言葉を把握する教育を受けて来たものと考えられます。

…私は職業人時代には、物事を表面的に判断してはならない、よくよく考えて判断しなさいと教えられ訓練させられてきました。私事ですが、昨日は孫が遊びに来ました。私の家では、食事中に肘をついて食べること、人前で足を組んで座ることは禁止です。その理由は、成長して社会人となった時に分かるでしょう。教育とは試験の時の点数が良いことではなく、思わぬ時に評価されるという偶然的な必然を生み出す陰の力にあります。偶然的な必然とは、本日のマリアの判断力に表れていると言えます。

(6)30節～33節は天使ガブリエルの説明です。まるで歌舞伎役者の口上の様です。歌舞伎十八番（18番と書いてオハコと読みます）「勧進帳」では弁慶が富樫左衛門に疑われた時に奈良東大寺再

建のために書かれた説明文を読み上げます。実は何も書かれていない白紙の巻物を弁慶が読み上げて行くのです。以前、私と共に働いていた人が歌舞伎好きで「歌舞伎検定」保持の実力者でした。

ガブリエルの説明口上に対して、34節でマリアは実に的確に反論しています。2千年前のユダヤ教の地域では社会人教育がきちんとなされていたことを証明しています。具体的には旧約聖書のレビ記には食物規定などが記されています。聖書を読むとは人間の社会の中でどの様に生きて行くのかを理解するということでもあります。現代の日本の社会では宗教教育に偏見がある様に感じられます。物事を表面的に捉えて報道する報道機関（テレビ・ラジオ・新聞）に対しては明確に抗議すべきであると思います。また、キリスト教主義学校のキリスト教教育が単なる飾り物になっている状況に対しては「No. そうであってはなりません」と反論すべきであると思います。現在のキリスト教の団体は言うべきことを言わない状態であり、今日の聖書箇所のマリアの姿を学んでほしいと思っています。私は社会人勤務時代に、言うべきことがあれば、深く深く考えて、尚かつ正しいと思えば、上司に言いなさいと教えられました。一言で言いますと「自由闊達」の伝統であり、「へこたれるな」の精神です。

(7)天使ガブリエルはマリアからの疑問や反論に対して押され気味となりますが、「魔法の一言」を発するのです。37節〔(1:37)神にできないことは何一つない。〕その一言にマリアは頷きます。38節〔(1:38)マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。〕ここには、マリアの決意が示されています。「この身に成りますように」と言うことは、主なる神と共に生きて行く、人生を歩んでゆくことを決心したことに他なりません。

本日は、待降節・アドベント第1主日であります。待降節とは1年の始まりです。「お言葉どおり、この身に成りますように」そのことを繰り返し考えつつ、主の降誕・クリスマスを迎えては如何でしょうか。

・・・お祈りします。